

大学新入生のソーシャル・サポートと心理的適応 —自己充實的達成動機の媒介的影響—

Social Support for the Psychological Adaptation of New University Students: Mediation Effects of Self-fulfilling Achievement Motivation.

福岡 欣治

文化政策学部文化政策学科

Yoshiharu FUKUOKA

Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

大学新入生の心理的適応におよぼす家族および友人のソーシャル・サポートと達成動機の影響を検討した。福岡(2000)の枠組みを踏襲しつつ、本研究では精神的健康度を含め2時点においてこの問題を検討した。247名の大学新入生から得た入学後3ヶ月時点でのデータを分析した結果、主として友人のサポートが自己充實的な達成動機を高めることで大学新入生の学業および大学生活全般についての意欲低下を防ぐ効果をもつこと、また家族および友人のサポートが精神的健康を支える効果をもつことが示された。また、3ヶ月時点の回答者のうち127名から得られた入学後9ヶ月時点でのデータでも、同様の分析結果が得られた。ただしこれらの回答者はやや授業に対する意欲が高い傾向にあり、再検討の余地を残すものであった。これらの結果をふまえ、大学新入生における環境移行への心理的適応過程に対する今後の検討の方向性を考察した。

キーワード：大学新入生、ソーシャル・サポート、学習意欲、精神的健康、友人関係

The effects of social support by family and friends, as well as the effects of achievement motivation on psychological adaptation of new university students were investigated. Following the model developed by Fukuoka (2000), the effects of entering a university, including the mental health conditions of students, were sampled in 247 new university student participants at three months and nine months after entrance. Analysis of data sampled at three months indicated that support by friends is effective in preventing the motivational decline of new students for studying and living activities, through improving self-fulfilling achievement motivation. It was also shown that support by family or friends are effective in maintaining their mental health. The same result was obtained from data sampled from 127 participants of the original sample at nine months after admission. However, these results might have to be reconsidered because students who participated in the study had higher motivation for learning. The direction of future studies on psychological adaptation of new university students to environmental changes is discussed.

Keywords: new students of university, social support, learning motivation, mental health, friend relationship

問題と目的

大学生にとって、親からの心理的離乳、自我同一性の確立という発達課題に取り組みつつ、大学という新たな環境に適応し学業生活に積極的に関与していくことは、決して容易なことではない。大学生になるということは、しばしば大きな環境変化および対人関係上の質的变化を経験する、大きな発達の移行期である(南・山口, 1992; 落合・佐藤, 1996)。

そもそも、大学生活への適応は古くて新しい問題であり、スチューデント・アパシー(Walters, 1961)として以前から取り上げられてきた(たとえば笠原, 1973, 1984; 土川, 1990)。近年は深刻な精神障害としてのアパシーは少ないものの、軽い抑うつ症状を伴う意欲低下の問題はなお看過し得ないとされている(鉄島, 1993; 下山, 1995)。

他方、ストレス対処や心理的適応に及ぼす支持的な対人関係の役割は社会心理学や健康心理学の領域で近年広く認識されるようになっており(たとえば浦, 1992)、大学生を

対象とした研究も数多くおこなわれてきている(日本での初期のものとして、たとえば久田・千田・箕口, 1989; 嶋, 1991など)。さらに、大学生や専門学校生を対象に、周囲とのサポート関係と学業成績との関係を扱った研究もある(たとえばCutrona, Cole, Colangelo, Assouline, & Russell, 1994; 川原, 1999)。

このような動向をふまえると、大学新入生における環境移行への心理的適応過程をとりあげ、それを支持的な対人関係の視点から検討することは有用であり、また重要なことと考えられる。

すでに福岡(2000)は、大学生におけるソーシャル・サポートと抑うつとの間に自己充實的達成動機が影響していることを指摘した堀野・森(1991)の研究を発展させる形で、入学約6ヶ月時点での大学新入生を対象に家族および友人のソーシャル・サポートと達成動機、無気力傾向の関係を調べ、主として友人のサポートが自己充實的な達成動機を高めることで学業および大学生活全般についての

意欲低下を防ぐ効果をもつことを示唆する結果を得ている。ただし、この研究ではソーシャル・サポートを家族と友人それぞれ6項目で測定しており、また入学後約半年を経た一時点で変数間の関連性をみているに過ぎない。

そこで本研究では、以下の3点について福岡(2000)の研究を改善し、その知見を確証し発展させることを目的とした。

(1) 人口統計学的属性および志望順位など、受験関連の変数を統制する。

(2) 入学後約3ヶ月および9ヶ月時点で調査を実施し、結果の一般化可能性を高める。

(3) 大学生活への適応のみならず、精神的健康度も測定する。

調査1(入学後約3ヶ月時点)

方法

回答者 静岡県内の3大学(4年制大学1校、短期大学2校)における新入生を対象に調査をおこない、下記に示すすべての質問について記入に不備のなかった計247人(男25人、女222人)を分析対象とした。回答者の年齢の範囲は18-33歳(M=18.66、SD=1.90)であり、そのうち自宅通学者が81.8%であった。

測定内容 ①ソーシャル・サポート:福岡(2000, 2002)をふまえて構成した。家族と友人について各10項目(「あなたの気分をなごませたり、くつろがせてくれる」「あなたがふだんやらなくてはならない用事を手伝ってくれる」など; Table1 参照)で、自分を支

えてくれる人がいるかどうかを回答させた。友人については、大学入学後の現時点における友人関係を想定するよう指示した。回答は各項目につき4件法(1.全然いない~4.確かにいる)とした。なお、 α 係数は0.80以上であり、家族サポートと友人サポートの尺度間相関は $r=.40$ であった。

②達成動機:堀野・森(1991)の尺度を使用した。競争的達成動機(10項目:「競争相手に負けるのはくやしい」など)と自己充實的達成動機(14項目:「何でも手がけたことには最善をつくしたい」など)の2側面からなる。回答は原版と同じく7件法(1.全然あてはまらない~7.非常によくあてはまる)とした。 α 係数は0.80以上であり、競争的達成動機と自己充實的達成動機の尺度間相関は $r=.24$ であった。

③心理的適応:下山(1995)による意欲低下領域尺度と、日本版精神健康調査票GHQ(中川・大坊, 1985)の12項目版を使用した。前者は「学業」「授業」「大学生活」の3領域・各5項目からなる。回答は原版では4件法であるが、福岡(2000)に合わせて5件法(1.全くあてはまらない~5.大変あてはまる)とした。得点が高いほど意欲が低下していることを意味する。各尺度の α 係数は0.63~0.73の範囲内であり、尺度間相関は $r=.19\sim.48$ であった。GHQ 12項目版については、4件法の回答をいわゆるGHQ方式(0-0-1-1)で得点化して合計点を求めた。高得点ほど精神的に不健康であることを意味する。 α 係数は0.75であった。なお、12項

Table1 ソーシャル・サポートの測定項目

- 1) あなたの気分をなごませたり、くつろがせてくれる人は...
- 2) あなたがふだんやらなくてはならない用事を手伝ってくれる人は...
- 3) あなたの不満や悩みやつらい気持ちを受けとめ、耳を傾けてくれる人は...
- 4) あなたが日中に外出するとき、必要なことを代わりにやってくれる人は...
- 5) 困ったことやわからないことがあるとき、相談にのってくれる人は...
- 6) あなたが1日以上家を留守にしなくてはならないとき、その間の世話をしてくれる人は...
- 7) 物事を決めなくてはいけないとき、あなたの参考になる意見を言ってくれる人は...
- 8) 身体の具合が思わしくないとき、面倒をみてくれる人は...
- 9) 必要なとき、あなたに物質的・金銭的な支援をしてくれる人は...
- 10) 何をするというのでなくても、あなたをそっと見守ってくれる人は...

「家族」と「友人」について、それぞれ同じ10項目で質問。選択肢は「1. 全くいない」「2. たぶんいない」「3. いちおういる」「4. 確かにいる」の4件法。

目版の該当項目の確認は福西（1990）に依った。

④人口統計学的属性および受験に関する要因：年齢、性別、通学形態（自宅、自宅外）、志望順位、現役合格か否か等についてたずねた。

実施方法 授業中に調査票を配布して協力を求め、約2週間以内に提出させた。調査時期は2002年7月上旬～中旬であった。

結果と考察

基礎集計 回答者の基本属性についての集計結果をTable2に、また尺度の平均値等をTable3に示す。回答者の多くは第一希望と

して入学したとしており、またほとんどが現役合格であった。ソーシャル・サポートについては家族・友人ともやや高得点よりの分布であったが、その他の尺度については分布の偏りはみられなかった。

指標間の関連性（偏相関係数） まず、年齢・性別・通学形態、志望順位、現役合格か否か、および所属先（調査実施大学；ダミー変数化）がそれぞれ測定変数の一部と関連することを確認した（Table4）。たとえば男性より女性の方が家族および友人サポートの得点が高く、自宅外通学者では家族サポートの得点が低く、現役合格者の方が学業に対する意欲低下が少ないといった関係がみられた。

Table2 回答者の属性に関する回答分布

質問項目	カテゴリー	回答数	(%)
所属	短期大学A	62	25.1
	短期大学B	56	22.7
	4年制大学	129	52.2
性別	男性	25	10.1
	女性	222	89.9
年齢	18歳	160	64.8
	19歳	76	30.8
	20歳以上	11	4.5
居住	自宅	202	81.8
	自宅外	45	18.2
志望順位	第1希望	148	59.9
	第2希望	68	27.5
	第3希望以下	31	12.6
現役合格か否か	現役合格	229	92.7
	1年浪人	9	3.6
	2年以上浪人	1	0.4
	社会人入学など	8	3.2

Table3 調査1における測定尺度の基礎統計量

測定変数	項目	平均	SD	範囲	α 係数
①ソーシャル・サポート：家族	10	32.92	5.91	15-40	0.87
②ソーシャル・サポート：友人	10	29.79	6.03	10-40	0.90
③達成動機：自己充實的	14	76.33	10.83	31-98	0.88
④達成動機：競争的	10	45.45	7.83	22-66	0.81
⑤意欲低下：学業	5	15.10	3.47	7-25	0.63
⑥意欲低下：授業	5	11.59	3.98	5-22	0.68
⑦意欲低下：大学生活	5	13.47	4.06	5-23	0.74
⑧精神的健康度	12	4.56	2.81	0-12	0.75

所属による違いも一部有意であった。

そこで、これらの変数をすべて統制し、ソーシャル・サポート、達成動機（自己充實的、競争的）、心理的適応（意欲低下3尺度、精神的健康度）の偏相関係数を算出した（Table5）。その結果、家族と友人のサポートはともに、競争的達成動機とは関連していなかったが自己充實的達成動機とは有意な正の相関があり、また心理的適応の諸指標とも有意な関連を示した。また、自己充實的達成動機は学業および大学生生活全般の意欲低下と正の相関があった。

ソーシャル・サポート、達成動機、心理的適応の関係：パス解析 上記偏相関分析の結果をふまえ、福岡（2000）と同じく「家族と友人のソーシャル・サポートが達成動機を高め、それらが心理的適応に影響する」という仮説的な因果モデルを構成したパス解析をおこなった。その結果をFigure1に示す。図から明らかなように、友人のサポートが自己充實的達成動機を高めることで学業および大

学生生活全般の意欲低下を防ぐことを示すパスが有意であった。また精神的健康度には家族と友人の両サポートからの直接のパスが有意であった。さらに友人サポートから大学生生活全般への意欲、家族サポートから授業への意欲に対するパスも有意であった。

これらの結果は、福岡（2000）と同様に、大学入学後の友人関係におけるソーシャル・サポートが自己充實的な達成動機の維持向上に寄与し、心理的適応にもつながることを示している。また、家族のサポートも、大学生生活における意欲との直接の結びつきは弱いものの、精神的健康の維持とは関連していると言える。

調査2（入学後約9ヶ月時点）

方法

調査1の回答者に対し、半年後である翌年1月中旬～下旬にかけて、再度同内容（ただし、志望順位など受験に関わる質問は除く）の

Table4 調査1における属性変数と尺度得点との相関

属性に関する変数	尺度変数		ソーシャル・サポート		達成動機		意欲低下		精神的	
	家族	友人	自己充實	競争	学業	授業	大学生生活	健康		
性別(男=1,女=2)	0.14*	0.13*	0.05	-0.12+	0.09	-0.11+	-0.04	-0.03		
年齢	-0.11+	-0.08	-0.03	-0.11+	-0.20**	-0.08	-0.01	0.02		
居住(自宅=1,自宅外=2)	-0.31***	-0.13	*0.03	-0.06	-0.03	-0.07	0.01	-0.06		
志望順位	0.00	-0.10	-0.06	0.02	0.04	-0.10	0.01	-0.04		
現役合格か否か(現役=0,浪=1)	-0.13*	-0.08	-0.03	-0.08	-0.20**	-0.10	-0.04	-0.02		
所属ダミー1(短期大学A=1,他=0)	0.05	0.07	-0.11+	0.06	0.28***	0.08	0.20**	0.10		
所属ダミー2(4年制大学=1,他=0)	0.07	-0.01	0.13*	0.00	-0.17***	-0.06	-0.18**	-0.11+		

***p<.001 **p<.01 *p<.05+p<.10

Table5 調査1における変数間の関連性(偏相関係数)

測定変数	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
①ソーシャル・サポート:家族							
②ソーシャル・サポート:友人	0.37 ***						
③達成動機:自己充實的	0.17 **	0.27 ***					
④達成動機:競争的	0.01	0.03	0.26 ***				
⑤意欲低下:学業	-0.13 *	-0.14 *	-0.39 ***	-0.08			
⑥意欲低下:授業	-0.18 **	-0.06	-0.06	-0.02	0.27 ***		
⑦意欲低下:大学生生活	-0.14 *	-0.30 ***	-0.29 ***	-0.03	0.46 ***	0.17 **	
⑧精神的健康度	-0.20 **	-0.20 **	-0.01	0.09	0.22 ***	0.15 *	0.40 ***

***p<.001 **p<.01 *p<.05+p<.10

調査票に回答を求めた。すべての質問項目について記入不備のない有効回答者数は、127人（男9人、女118人）であった。

結果と考察

基礎分析 調査2で有効回答の得られた人は調査1の全有効回答者の半数強であったため、まず、調査1のみの有効回答者と調査1・2両方の有効回答者で、調査1における属性および尺度得点を比較した。属性の比較をTable6、尺度得点の比較をTable7に示す。その結果、属性については回答者の所属、尺度得点については「授業に対する意欲低下」のみ5%水準以下での有意差がみられ、後者については両調査の回答者の方が意欲が高かった。この結果は後の分析結果の解釈にあたって考慮する必要がある。

この分析の後、調査2における測定変数の平均値等を算出した（Table8）。 α 係数も許容範囲内の高さであった。

ソーシャル・サポート、達成動機、心理的適応の関係 最初に調査1と同じ変数（年齢、性別、通学形態、志望順位、現役合格か否か、短大／4年制大学）を統制して、調査2における変数間の偏相関係数を算出した。その結果、調査1で見出された結果をほぼ完全に再現した（Table9）。また、パス解析も調査1と同じモデルでおこない、その結果もほぼ同様であった（Figure 2）。

さらに、調査1の測定変数をすべて統制した上で、上記と同様の分析をおこなった。その結果、ソーシャル・サポートから心理的適応への直接のパスは有意ではなかったが、友人のソーシャル・サポートが自己充實的達成動機を高めることで学業および大学生活全般の意欲低下を防ぐことを示すパスは、なおも有意であった。加えて、自己充實的達成動機は精神的健康度とも関連していた。

これらの結果は、友人サポートと自己充實的達成動機が結びつき、そして心理的な適応

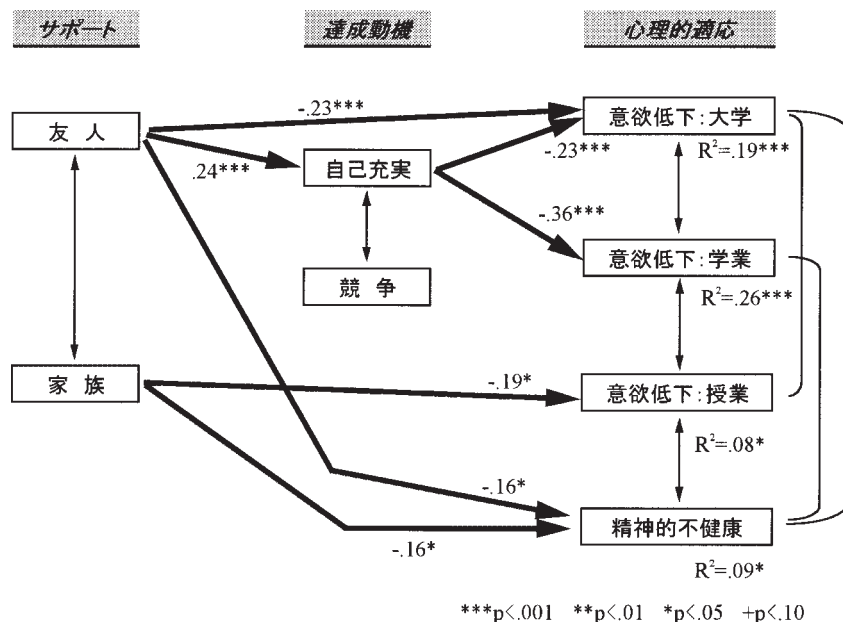


Figure 1 調査1における変数間の関連性(パス図)

注：個人属性および受験に関する変数を回帰式に含め統制した結果。絶対値が0.15以上のパス係数のみを記載。同順位の変数間の係数は省略（図中細線、Table5を参照）。

Table6 調査1における回答者の基本属性
：調査1のみの回答者と両方への回答者との比較

質問項目	カテゴリー	回答数		χ^2 検定
		調査1のみ	両調査に回答	
所属	短期大学A	41	21	$\chi^2(2) = 22.41$ p<.001
	短期大学B	13	43	
	4年制大学	66	63	
性別	男性	16	9	$\chi^2(1) = 2.65$ n.s.
	女性	104	118	
年齢	18歳	77	83	$\chi^2(2) = 2.78$ n.s.
	19歳	35	41	
	20歳以上	8	3	
住居	自宅	102	97	$\chi^2(1) = 2.93$ p<.10
	自宅外	18	30	
志望順位	第1希望	79	69	$\chi^2(2) = 3.53$ n.s.
	第2希望	29	39	
	第3希望以下	12	19	
現役合格か否か	現役合格	108	121	$\chi^2(1) = 2.54$ n.s.
	その他	12	6	

Table7 調査1における尺度得点：調査1のみの回答者と両方への回答者との比較

測定変数	調査1のみの回答者		両調査の回答者		t値
	平均	SD	平均	SD	
①ソーシャル・サポート：家族	33.24	5.79	32.61	6.02	0.85
②ソーシャル・サポート：友人	30.29	6.06	29.32	5.99	1.26
③達成動機：自己充實的	76.61	10.01	76.07	11.58	0.39
④達成動機：競争的	45.56	7.38	45.35	8.26	0.20
⑤意欲低下：学業	15.28	3.36	14.93	3.58	0.43
⑥意欲低下：授業	12.58	4.16	10.65	3.58	3.90***
⑦意欲低下：大学生生活	13.42	3.97	13.51	4.17	0.18
⑧精神的健康度	4.71	2.75	4.43	2.88	0.79

***p<.001

Table8 調査2における測定変数の平均値

測定変数	平均	SD	範囲	α 係数
①ソーシャル・サポート：家族	33.54	5.12	22-40	0.83
②ソーシャル・サポート：友人	30.06	5.43	10-40	0.88
③達成動機：自己充實的	74.35	10.94	43-98	0.87
④達成動機：競争的	44.87	7.76	21-63	0.80
⑤意欲低下：学業	15.97	3.80	8-25	0.71
⑥意欲低下：授業	11.84	4.04	5-22	0.66
⑦意欲低下：大学生生活	14.13	4.27	5-24	0.76
⑧精神的健康度	4.48	2.95	0-12	0.78

を維持向上させることを改めて示唆するものといえる。

結 語

本研究の結果は、主として友人のサポートが自己充實的な達成動機を高めることで大学新入生の学業および大学生活全般についての意欲低下を防ぐ効果をもつこと、また家族お

よび友人のサポートが精神的健康を支える効果をもつことを示す。本研究の目的に沿って、福岡（2000）の結果を確認・発展させるものといえる。

ただし、調査2の回答者は相対的に授業に対する意欲が高い傾向にあり、この点で調査2の分析結果に対しては若干疑問の余地がある。ただし、調査2の結果は基本的に調査1と同様であり、また調査1の変数をすべて統

Table9 調査2における変数間の関連性(偏相関係数)

測定変数	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
①ソーシャル・サポート:家族							
②ソーシャル・サポート:友人	0.57 ***						
③達成動機:自己充實的	0.26 **	0.32 ***					
④達成動機:競争的	0.09	0.07	0.27 **				
⑤意欲低下:学業	-0.03	-0.11	-0.42 ***	-0.04			
⑥意欲低下:授業	-0.18 *	-0.04	-0.28 **	-0.03	0.29 **		
⑦意欲低下:大学生活	-0.28 **	-0.33 ***	-0.37 ***	0.00	0.44 ***	0.29 **	
⑧精神的健康度	-0.21 *	-0.26 **	-0.08	0.05	0.09 ***	0.19 *	0.22 *

***p<.001 **p<.01 *p<.05 +p<.10

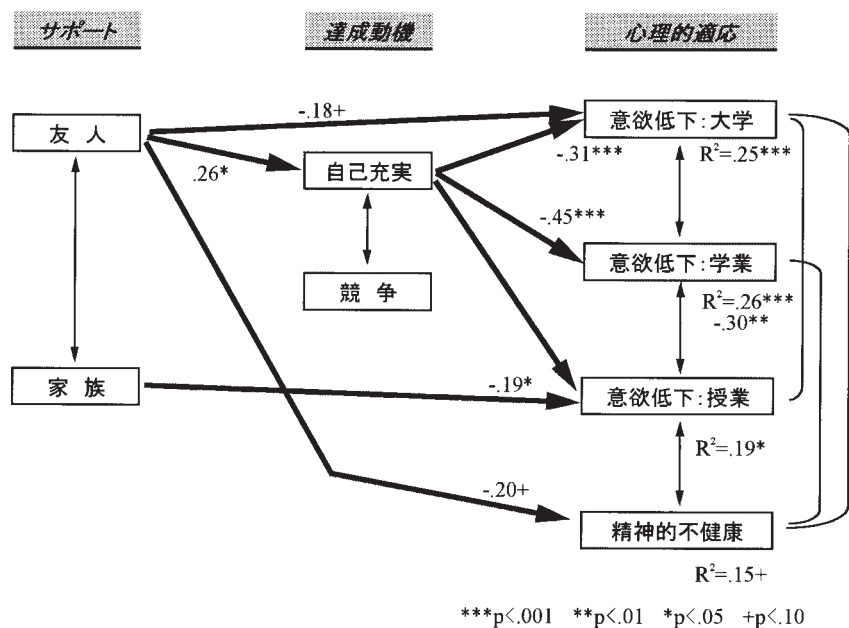


Figure 2 調査2における変数間の関連性(パス図)

注：個人属性および受験に関する変数を回帰式に含め統制した結果。絶対値が0.15以上のパス係数のみを記載。同順位の変数間の係数は省略（図中細線、Table 9を参照）。

制してもなお自己充實的達成動機の媒介的な影響は有意であった。従って、ある程度の留保をしつつも、友人サポート→自己充實的達成動機→新入生の意欲維持の関連性が示されたと解釈してよいであろう。

他方、本調査の対象者は大半が女性であるが、福岡（2000）では男女で若干の差があることも見いだされている。本研究では性別を統制要因として扱い結果の一般化を図ったが、たとえば友人関係についても同性と異性では異なる性質、影響をもつことが先行研究では示唆されており（福岡・橋本，1992；和田，1993）、この点については検討の余地があると考えられる。

なお、最近の研究として、たとえば辻野・橋本（2006）は大学生のアパシー傾向とソーシャル・サポートの関係をストレスイベントと絡めて検討している。この研究ではストレ

スイベントの経験がアパシー傾向に直接結びつくという結果には必ずしもなっていないが、概念的には何らかの要因によって心理的適応度が低下する現象をソーシャル・サポートが緩和する、といったサポートの調整変数的な役割（Baron & Kenny, 1986）を想定することは十分可能である。また、本研究で測定したソーシャル・サポートはいわゆる「知覚されたサポート」であり、実際にサポートを受けた経験ではなく自分自身にとって支持的な（必要な時があればサポートが得られるという）対人関係が存在するかどうかの知覚を問題にしている。しかし、実際に意欲が低下するかどうかは、何らかの経験をした個人が他者と実際におこなう相互作用の性質によっても左右されるであろう。これらの観点からの検討も今後の課題である。

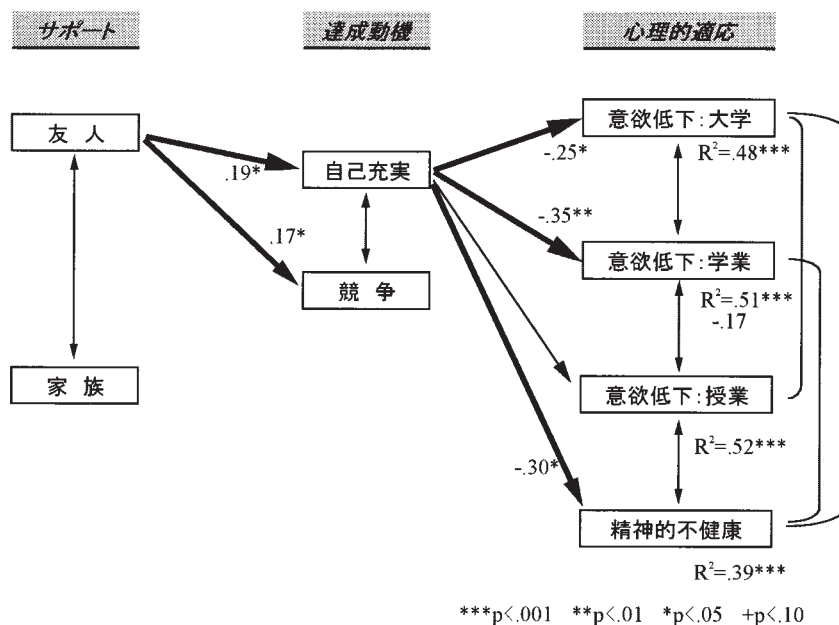


Figure 3 調査2における変数間の関連性：調査1の変数を統制(パス図)

注：個人属性および受験に関する変数に加え、調査1の変数をすべて回帰式に含め統制した結果。絶対値が0.15以上のパス係数のみを記載。同順位の変数間の係数は省略（図中細線、Table 9を参照）。

引用文献

- Baron, R.M., & Kenny, D.A. (1986). The moderator-mediator variable distinction in social psychological research: conceptual, strategic, and statistical considerations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 1173-1182.
- Cutrona, C.E., Cole, V., Colangelo, N., Assouline, S.G., & Russell, D.W. (1994). Perceived parental social support and academic achievement: An attachment theory perspective. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66, 369-378.
- 福西勇夫 (1990). 日本版General Health Questionnaire (GHQ)のcut-off point. *心理臨床*, 3, 228-234.
- 福岡欣治 (2000). 大学生における家族および友人の知覚されたソーシャル・サポートと無気力傾向—達成動機を媒介要因とした検討— 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 14-3, 2-1-2-10.
- 福岡欣治 (2002). 日常ストレス状況での友人との支持的相互作用と気分状態(2)日本心理学会第66回大会発表論文集, 871.
- 福岡欣治・橋本 宰 (1992). 個人のもつ特定のサポート源に関するソーシャルサポートの測定 *健康心理学研究*, 5(2), 32-39.
- 久田 満・千田茂博・箕口雅博 (1989). 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み(1) 日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 143-144.
- 堀野 緑・森 和代 (1991). 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機要因 *教育心理学研究*, 39, 308-315.
- 笠原 嘉 (1973). 現代の神経症—とくに神経症性 apathy(仮称)について *臨床精神医学*, 2, 153-162.
- 笠原 嘉 (1984). *アパシー・シンドローム — 高学歴社会の青年心理 —* 岩波書店
- 川原誠司 (1999) 青年後期における友人サポートの学業成績への影響 宇都宮大学教育学部紀要, 第1部, 49, 49-64.
- 南 博文・山口修二 (1992). 大学生活への移行 山本多喜司・S.ワップナー(編著) *人生移行の発達心理学* pp.179-204.

- 中川泰彬・大坊郁夫 (1985). 日本版GHQ精神健康調査票手引 日本文化科学社
- 嶋 信宏 (1991). 大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究 *教育心理学研究*, 39, 440-447.
- 下山晴彦 (1995). 男子大学生の無気力の研究 *教育心理学研究*, 43, 145-155.
- 鉄島清毅 (1993). 大学生のアパシー傾向に関する研究—関連する諸要因の検討— *教育心理学研究*, 41, 200-208.
- 土川隆史(編) (1990). *スチューデント・アパシー(メンタルヘルス・シリーズ)* 同朋舎
- 辻野琢也・橋本 宰 (2006). 大学生のアパシー傾向に影響をおよぼすストレス・イベントとソーシャル・サポートの関連 *同志社心理*, 53, 31-39.
- 浦 光博 (1992). *セレクション社会心理学8 支えあう人と人 — ソーシャル・サポートの社会心理学 —* サイエンス社
- 和田 実 (1993). 同性友人関係:その性および性別役割タイプによる差異 *社会心理学研究*, 8, 67-75.
- Walters, P.A., Jr., (1961). Student apathy. In G.B.Blaine, Jr., & C.C.McArthur (Eds.) *Emotional problems of the students*. New York: Appleton-Century-Crofts. (ウォルターズ P.A., Jr. 笠原 嘉・岡本重慶(訳) (1975). 学生のアパシー プレイン, G.B., Jr.・マッカーサー, C.C. 石井完一郎・岨中 達・藤井 虔(監訳) *学生的情绪問題* 文光堂 pp.106-120.)

謝辞

調査の実施に際してご協力くださった各大学の先生方、ならびに回答してくださった学生の皆様に深く感謝いたします。

註

本研究の遂行にあたり、平成14年度静岡文化芸術大学文化政策学部長特別研究費の助成を受けた。なお、本稿の一部は、日本応用心理学会第70回大会(2003年9月)においてポスター発表されている。